

持続可能な多言語多文化共生社会を築く 「共生日本語教育」の可能性

半原 芳子

学位取得年月：平成24年3月
取得学位名：人文科学博士
学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】 地域日本語教育、 言語生態学、 言語内共生、 相互学習
【要旨】

本研究は、持続可能な多言語多文化共生社会の構築を目指す「共生日本語教育」の可能性を追究するものである。共生日本語教育は、地域における日本語母語話者と日本語非母語話者の相互学習の一つとして位置付けられる第二言語教育としての日本語教育である。本研究では、共生日本語教育が、その実現を目指す「言語内共生」がどのように促進されているかを実証的に明らかにすることを研究目的とした。言語内共生は、日本語母語話者と日本語非母語話者が、接触場面において言語自体を変化させ創造する過程である。

まず、言語生態環境における言語生態(言語の働き)の保全の実態を教室のやりとりから探った。言語生態環境には心理的領域(バイリンガルや多言語使用者の mind 知性・精神の中での、ある言語と他の言語との相互交渉的關係が形成される領域)と、社会的領域(ある言語と、その言語がコミュニケーションの手段として機能する社会との間の相互交渉的關係が形成される領域)がある。【研究1】では、日本語非母語話者の心理的領域の実態を探った。その結果、日本語非母語話者は、日本語で受け取る知識・情報や、これまで彼らが母語を通じて培ったと考えられる既有的知識・経験・感覚・価値観と突き合わせながら丁寧に吟味・解釈している様子が観察された。そして、そうした母語と日本語の相互交渉的關係の上に、「自分が住む社会および世界に対する能動的な認識の形成」、「言葉の意味の生成と獲得」、「問題に向き合う自己の想像および問題解決に向けた意志の形成」という三つの段階を辿り認識を深化させていることが分かった。【研究2】では、日本語母語話者と日本語非母語話者の言語生態環境社会的領域の実態を探った。その結果、日本語母語話者と日本語非母語話者は共生日本語によるやりとりを通じ、「協働」、「自己保存」、「異なりの内在的統合」の三つから成る言語的共生化の過程を創出していることが明らかとなった。具体的には、「自己保存」の過程として「自己の経験と意見の表出」、「異なりの内在的統合」の過程として「他者の視点の取り入れ」、「自己の視点の批判的考察」、「新たな第三の視点と意見の構築」が観察された。そして、これらの「自己保存」と「異なりの内在的統合」の過程を支えていたのは、両者の絶え間ないやりとりと交渉すなわち「協働」の過程であった。

次に、参加者の当事者評価をケーススタディから探った。【研究3】では、日本語母語話者(1名)が共生日本語教育への参加を通じ、共生に対しどのような認識を持つようになったかを探った。対象とした日本語母語話者は研究2の対象者である。結果、その日本語母語話者は、共生日本語教育参加前は共生に対する強い困難を感じていたのに対し、共生日本語教育参加後は、受け入れ側であり言語多数派である自分の言語行動の見直しや、日本語非母語話者の母語・母文化の尊重という積極的な認識を持つようになったことが明らかとなった。【研究4】では、日本語非母語話者(1名)が共生日本語教育への参加を通じ、共生に対しどのような認識を持つようになったかを探った。対象とした日本語非母語話者は、長年地域の日本語教室に通っている参加者である。結果、その日本語非母語話者は、共生日本語教育参加前は日本への適応を志向しながらそれができない不全感を持っていたのに対し、共生日本語教育参加後は、日本語母語話者と日本語非母語話者を対等なパートナーとして位置付け、自己の役割を拡大していることが明らかとなった。

以上、二つの観点にもとづく4つの研究結果から、共生日本語教育が、言語・文化背景を異にする者同士が、それぞれが持つ既存能力である言語の力を発揮し、それらを保持・伸張、統合しあいながら、共により良く持続的に生きる「持続可能な多言語多文化共生社会」を築く日本語教育であることが示唆された。

(はんばら よしこ)